

## 8. 高齢化社会における新しい形のコミュニティの創設（継続2年目）

福祉マンション研究会  
(神奈川県横浜市)

### 1. 活動の背景と目的

横浜市には、住宅供給公社が民間の土地所有者の建設する住宅を借り上げて、国の地域特別賃貸住宅制度に基づき、高齢者に低価格で貸し出す「シニア・りぶいん制度」がある。これを利用した、市民による「福祉マンション」建設を試みた。

市民のメンバーは、地主、建築家、教諭、行政マン、議員、医療関係者、主婦などの20名強で構成されているが、各団体のメンバーには団体として、あるいは団体を離れた個人としての参画を要請し、1991年の末に同会が発足した。総じて活動歴の豊富な個人や団体なので、ネットワークばかりではなく、NPOの諸原理やルールについての共通認識のベースを持っているので、市民運動にありがちな意志疎通の不備や討議の空回りがなく事が進んだ。特に、それぞれの専門家がいてもプロジェクトの現実化に大きな力となった。

横浜市の高齢者用住戸へ住まう人への対応は、生活指導相談員の配置と家賃補助に限られており、高齢者が真に健康的に暮らせるシステムは用意されていない。高齢者や障害者が隔離されて生活をするのではなく、一般の人々と「普通」に暮らせることがノーマライゼーションの基本条件であると考え。そのためには、使いやすいキッチン、トイレ、風呂場またバリアフリー構造を備えたハードの面と、社会サービスが付加され、住民がそれを利用し参加できるソフトを持つマンションの建設が必要であり、かつ周辺住民も含めて誰もが利用でき参加できる地域開放型の施設にする必要がある。

そこで、昨年94年度の助成事業の成果は、ハード面を中心に次の事項であった。

1) 建物の建設、2) 人材ネットワークづくり、3) 福祉ワーカーズの誕生、4) 車椅子用キッチンの開発、5) 障害者用浴槽の研究と選定、6) マンション管理規約の研究と「住まい方宣言」の提案、7) 診療所基本計画の立案などの事業であった。

引き続き本年95年度の事業としてはソフト面を中心として、次に掲げる事業の試行と実践が行われた。

1) 自治会結成の呼び掛け、2) 福祉ワーカーズのアドバイザー機能充実のための研究（生活補助具、介護用品の調査研究、行政の福祉サービスの研究など）、3) 医療情報管理システムの研究（患者管理システムの創設、ホリスティック医療の実践手順の研究など）、4) マンション周囲の計画（敷地内、屋上庭園等の木々の研究と選定など）、5) 地域医療の展開（長生き・養生医学の研究と実践、マンション内の健康講



平成7年9月に竣工した「ラ・クラッセ西寺尾」

座の企画、CATVを使った健康講座の放映、薬膳通信教育実験の実施など)、6) 経営の実際(経営の仕方、保険請求の学習)、7) 高齢者住人に対するアンケート調査等である。

また、マンションは9月に竣工し「ラ・クラッセ西寺尾」と命名された。スペイン語で、至高、クラシック、クラス、学級、教室の意味である。しかし、わが会のメンバーは「ラクに暮らせ」と呼んでいる。

10月1日から住民の入居が始まった。

## II. 活動の内容

### 1. 自治会結成の呼び掛け

このマンションを「福祉マンション」に名実ともにするのはひとえに「自治会結成」の出来にかかっていると言って良い。特に、税金を使った建物ということで、公平の原理による「厳正なる抽選」方式のために、会のメンバーが一人も入居できない現状ではなおさら一層自治会に期待がかかる。マンション内の出店である福祉ショップ「らく・らっく」と診療所「神之木クリニック」がこの自治会に入る権利があるので、オーナーと福祉ショップ、診療所の連名で自治会結成を呼び掛けた。

総会で自治会長に地主、副会長に高齢者入居の住人、会計はらく・らっくから、幹事はクリニックからそれぞれ選出した。

### 2. 福祉ワーカーズのアドバイザー機能充実のための研究

生活補助具、介護用品の調査研究、行政の福祉サービスの研究などを、他県にまで出かけて修得に行くなど精力的に行動した。特に後半では、直接に展示販売会に出かけて、説明して販売する実技の実習に重きをおいた。

### 3. 医療情報管理システムの研究

#### <患者管理システムの創設>

患者や入居高齢者の医療管理を目的としたパソコンによるシステムづくりを試みた。財政難のおりから比較的低廉なMS-DOS機を11月に2台導入したが、内1台が初期不良であったのに気づくのに5ヶ月の時間がかかってしまい、システムの構築に多大な影響が出

ていた。その後、保険請求と同時に処理するシステムづくりに着手しているが、2月からようやく半分の機能が使えるところまでになってきているものの、バグなどもかなりあり、完成まであと半年は必要と思われる。

#### <ホリスティック医療の実践手順の研究>

出来るだけ薬、注射をしない医療であり、相談者を身、心や宗教観までを含めた総合体としてとらえて、相談者みずからの気づきを基調とした医療の実践を行うにあたり、その手順の研究を試みた。このマンション建設の経緯から基本コンセプトを「みんなで治す」に



介護用品学習会

定め、西洋医学と東洋医学の融合をはかり、日常の生活習慣に重きを置き相談者と共に考える姿勢を打ち出した。その為の手順の第一歩として体質診断を重視して、毎日の食生活の指導をするため、後述する「薬膳健康講座」の導入を図った。

#### 4. マンション周囲の計画

敷地内、屋上庭園等に植える木々の研究と選定を、植木の専門家とハーブの専門家、漢方の専門家と話し合いを定めた。すべて、薬効があり、神之木の気候風土に合う植物とした。また、市の外郭団体の財団の「花いっぱい運動」に応募したところ助成自治体に選ばれ、プランターと種子が贈られてきている。

#### 5. 地域医療の展開

##### <長生き・養生医学の研究と実践>

日常気楽に飲める「長寿茶」を創案した。診療所の患者やマンションの高齢者に広めた。また、インド医学のパンチャカルマ（ゴマ油マッサージなどを中心とした施術）を厚生省の助成事業としてアユルベーダ医学協会と協力して行うことになった。パンチャカルマはすでに抗老衰、抗がんなどの作用が有ることが医学的に証明されており、追試実践の意味あいであり、このマンションにふさわしい企画といえる。

##### <マンション内の健康講座の企画>

予防医学を重点とした健康講座を院内を中心に行った。幾人かの外部講師にもお願いした。また、3回ほどマンション外に出た出張講座も行った。

##### <CATVを使った健康講座の放映>

幅広い層に西洋医学だけではない医学の考えを分かってもらうために「神之木クリニック」から発信する情報を、話題のメディアであるCATVを使う実験を試みた。横浜テレビ局から、95年7月から始めている。文字情報と講演等であるが、半年ぐらいで反応が出てきている。また、エリア内での双方向の通信を利用したFAXでの問診表による体質診断を行ったが大変好評であった。

##### <薬膳通信教育実験の実施>

予防医学の根底を過程の食事において、漢方の「薬膳」指導を試みようとした。系統的な知識の習得が必要であり、「通信教育」システムを考慮した。また、海外との交流を意識して、9月には中国北京市と済南市の病院、養生施設、薬膳訓練センターを視察した。そこで話がまとまり山東中医学院と提携して「通信教育」実験の作成に取り組んだ。福祉マンション研究会の名では中身との整合性は無くかつ解散が前提なので使えず、またクリニックの名では法の問題が出てくる。そこで新しいNPO「山東中医学院学友会」を医療部会のメンバーから作った。資金の面から生活クラブ生活協同組合との合同事業とした。急遽教材作成にかかり11月から実験をスタートした。現在約160名の受講生がいる。

また、残留孤児が開いている中華料理屋の支援の意味も含めて、毎月1回薬膳の試食会も楽しく開いている。

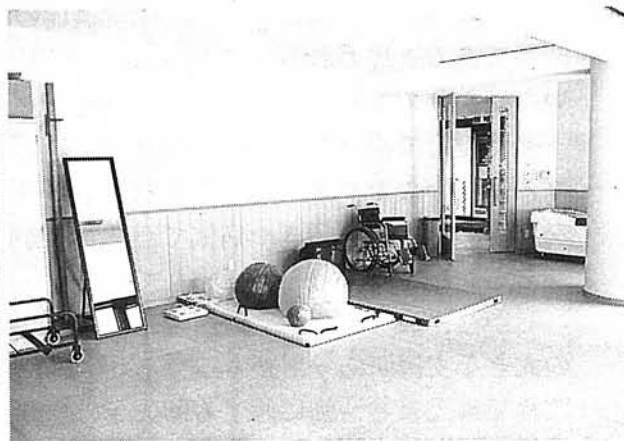
#### 6. 経営の実際

福祉ショップ「らく・らっく」も診療所「神之木クリニック」も経営については素人である。案の定、両者とも現実の対応に追われ、経営のイロハから学ばなければならず、未

だ四苦八苦である。特に、クリニックでは保険請求（診療報酬請求）という複雑怪奇な難題との取組によりやくなってきた段階である。



福祉ショップ「らく・らく」



マンション内のリハビリ室

## 7. 高齢者住人に対するアンケート調査

現在、第一回目のアンケート用紙法による予備調査を終えたところである。この後、分析後に何人かに聞き取り調査を行いたい。また、数カ月後に本調査を行いたい意向である。

## Ⅲ. 活動の効果および今後の課題

福祉マンション研究会が行おうとした活動のフィナーレの出来は自治会の有り様が握っていると思われる。「福祉マンション」が絵に描いた餅にならないためには、住民が一層重要なポジションを占めるであろう。そのための仕掛けづくりが今後一年間の最大のテーマであるが、それは福祉マンション研究会の仕事ではなくして、住民の自治会の仕事になろう。幸いなことに、「ラ・クラッセ西寺尾自治会」の会長は同研究会の会長平田氏が選出された。また役員も2名同会のメンバーが加わっているので、今後の展開に影響を残せることになろう。

福祉部会では、介護用品展示販売、マンション内の清掃、植栽等の事業を請け負うワーカーズを生み出したが、更なる一歩にはいくつかの問題があった。神奈川県や横浜・川崎両市で行われている公的助成事業を調べると、その種類は大きく4つあることが分かった。

1) 政府管掌健康保険に加入している人を対象にした、社会保険庁の「介護機器レンタル助成事業」、2) 社会保険診療報酬支払基金が、保険者からの拠出金を助成に使う、(財)テクノエイド協会の「福祉用具普及モデル事業」、3) 利用者が市町村窓口で直接申請する「日常生活用具給付事業」(ベッド売上の45%を占める)、4) 身体障害者を対象とした日常生活給付がある。1)と2)はシルバーマーク取得事業でかつ日本福祉具供給事業者協会の正会員にならなければ指定業者になれない(年会費10万、入会金10万)。3)は横浜市の場合、競争入札による指名業者の選定、川崎市は給付品目選定時の競争入札による給付事業者の選定があり、大手やベッドメーカー系列に押さえられているのが現状であり、資本力の弱い市民のワーカーズが指定業者になるのは至難の業である。4)はシルバー

マークも必要がなくて、指定業者が直接扱える。よって、当面の目標はシルバーマーク取得にあることが判明した。しかし、今回も講習会参加の選考にもれてしまっている。

家事援助、介護サービスの準備は順調に進んでおり、活躍している先輩ワーカーズなどもいて心強いが、福祉アドバイザー機能の獲得に関しては、知識習得のみならず、経験が必要であると思われる。また、食事サービスについては、新ワーカーズがようやく緒についたばかりであり、次年度にはプロジェクトの発足を目指したい。

多くの力で様々な事項が行われた。殆どが楽しく有意義に行われたのだが、事項があまりにも多いので、メンバーそれぞれが多分にオーバーワークとなった。後半、風邪の流行などもあって入院騒ぎや病気で寝込む人が続出してしまった。これもまた市民運動にありがちな弱点を露呈したと反省している。

しかし、これらの多くの達成事項を成し得たのも、ハウジングアンドコミュニティ財団の大きな支援があったからであり、なければこれだけの事業が成し得たのか自信がない。改めて市民事業活動に対する助成金の意義を感じている。